

目次

宇宙鉞山 うちゅう げんざん	小松左京 こまつ さきょう	005
時間と泥 じかん と どり	眉村卓 まゆむら たく	021
バイナリー惑星 わくせい	石原藤夫 いしはら ふじお	053
星は生きている	筒井康隆 つづい やすたか	109
宇宙救助隊二二八〇年 そふえい じゆうきゅうたい ににやっぴんねん	光瀬龍 みつせりゅう	115
処刑 しよけい	星新一 ほししんいち	149

宇宙鉦山

小松左京



「隕石群！」と第二レーダー係が叫んだ。

「左後方三十度、俯角十五度、距離八百、接近中！——相対速度プラス十」

「転進！」と艇長はおちついた声でいった。「右五度、仰角三度、第三速」

宇宙艇の中に、かすかにカーブを描く加速度が生じた。——スピードがかすかに上り、レーダーにしこまれた、音響転換器から発する警報音は徐々に低くなる。

だが、次の瞬間、前方四象限をカバーする第一レーダーが、キンキン音を発しはじめ、ドップラー効果を思わすように、急激に高まりはじめる。

「右前上方、隕石群！——大きい！——右三度、仰角二度十分、距離二百、相対速度プラス六」

「進路三八三にもどせ、俯角二度、速度二十におとせ」

宇宙艇は、わずかにブレーキをかけ、鼻面をふった。前後上下の音も、少し小さくなった。——と思ったのもつかの間、たちまち、進行方向レーダーに、黄色い警報光がかがやきはじめ、みるみるうちに赤みをおび、音響警報器が金切り声をたてはじめる。

「前も後もかこまれちゃった……」

操縦士は、舌打ちをしてブレーキをかけ、後方四象限を一度にうつし出すスクリーンをちよいと眺めて、小さきみに艇をあやつる。——ま正面を走っている隕石群の後尾をすれすれでかわすつもりだ。

「これじゃ、いつかはぶつかりますぜ」と機関士がいった。「ぬけ出す方向を見つけないや——長距離レーダーは、どうやってもつかえませんか？」

「いまそれを考えてる所だ」と艇長は腕組みしてつぶやいた。「ビームを細くして、スイープしてみろ」

第二レーダー係が、スイッチをきりかえた。——長距離レーダーの上に、細く、強